

# 特集

## 新型コロナウイルス感染症

### 何が起きたのか/起きているのか

はじめに、2020年はじめから現在の第三波に至るまで、コロナ禍での救急・集中治療、そして日々の診療継続にご尽力されているすべての医療従事者の皆さまに、心より御礼申し上げ、尊敬の意を表します。

2020年が「オリンピックイヤー」であったことを忘れてしまいそうになる。それぐらいに昨年は、社会と、人々の頭のなかで“新型コロナウイルス一色”になってしまいました。本誌編集委員会においても、「新型コロナウイルス感染症を本誌で、いつ、どのように取り上げるべきか」ということは、編集会議を行うたび話題にあがってきました。

一方で、最前線で診療にあたる救急・集中治療従事者には、相手が未知の感染症であるからこそ、“それ一色”にならず俯瞰的に、冷静に事実をとらえて判断することも求められていると考えます。そこで今号では、2021年の頭を飾るこのタイミングでこそ、「新型コロナウイルス感染症によって、救急・集中治療領域で何が起きたのか、そして何が起きているのか」を俯瞰し、振り返ることを目的とした特集を企画しました。

まず前半の「特集Ⅰ」では、2020年11月に開催された「第48回日本救急医学会総会・学術集会」の小倉真治会長（岐阜大学）にご理解とご協力をいただき、同学会で行われたシンポジウム「救急・集中治療領域における新型コロナウイルス対応」の発表内容を、誌面掲載させていただくこととしました。学会という“公”の場でどのような発表・報告がなされたのか、速報性をもって紙媒体の正式な記録に残すことには、一定の価値と意義があると考えます。

学会という“公”の場での発表に目を向ける一方で、商業誌である本誌としてはより“私”な目線での意見や報告を取り上げることも、その役割の一つであると考えます。そこで後半の「特集Ⅱ」では、このコロナ禍の最前線でこれまで、そして現在も奮闘されている先生方から、それぞれの立場で「何が起きたのか/起きているのか」をご報告いただくこととしました。地域・環境・立場・専門などが異なるからこそその“ナマの声”を、フラットにお届けします。

このような2本立ての特集構成のもと、“公”と“私”それぞれの目線からこのコロナ禍を振り返り・俯瞰することで、救急・集中治療従事者が今一度「何が起きたのか/起きているのか」を考察し、これからのウィズコロナ/ポストコロナの時代を生き抜くヒントが生まれることを期待しています。